中学校国語科における
聞くことの力を高めるための指導の工夫
――必要感のある課題の設定と、
生徒と作成したルーブリックを用いた形成的評価を通して――

長期研修員　　松元　崇敏

《研究の概要》

本研究は、中学校国語科で聞くことの力を高めるために形成的評価を重視した指導を行い、生徒の主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善を目指したものである。まず、生徒の実態から必要感のある課題を作成し、生徒に提示するようにする。次に、ルーブリックを生徒と作成し、生徒が学習の到達目標を把握できるようにする。さらに、ルーブリックを用いて相互評価、自己評価を行い、到達目標への達成度を形成的に把握できるようにする。また、ルーブリックを用いて振り返りの活動を行うことで、身に付けた力を実感できるようにする。これらの手立てを取り入れることで、聞くことの力を高めることができることを実践を通して明らかにしていく。

キーワード　【国語 - 中　聞くこと　形成的評価　必要感　ルーブリック　】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｇ０１－０３　令和元年度　２７０集

Ⅰ　主題設定の理由

中学校学習指導要領解説総則編（平成29年３月）では、指導と評価の充実として、「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには，指導と評価の一体化を図る中で，論述やレポートの作成，発表，グループでの話合い，作品の制作等といった多様な活動を評価の対象とし，ペーパーテストの結果にとどまらない，多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である」とされ、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価などを取り入れることが提唱されている。

また、中学校学習指導要領解説国語編（平成29年３月）では、国語科で育成を目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とし、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性」の三つの柱で整理された。この中の「思考力、判断力、表現力等」は「社会生活における人と人との関わりの中で，思いや考えを伝え合う力を高め，思考力や想像力を養うこと」とされ、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」として育成することが重要であると提唱されている。つまり、これからの学習指導において、指導と評価の一体化を図り、多面的・多角的な評価を行いながら、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を育成することが重要である。

国語科の「思考力・判断力・表現力等」は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」で構成されており、「話すこと・聞くこと」は三領域の最初に提示され、学習指導要領が「話すこと・聞くこと」を重視している表れと言えるだろう。

現在、「話すこと・聞くこと」の研究や研修が重ねられ、多くの指導方法が提案されているが、「話すこと」の研究・研修が多く、「聞くこと」の研究・研修は比較的少ない。

「聞くこと」は国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力の育成に必要な力であり、国語で求められている「伝え合う力を高める」ための第一歩となる。「聞くこと」の力を高めることができれば、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めることができるだろう。

平成31年度群馬県学校教育の指針では、教科経営・学習指導の重点として「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。

そこで、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、指導と評価の一体化を図った「聞くこと」の指導に当たり、パフォーマンス評価の要素を取り入れた「形成的評価」を重視した指導を行う。

まず、「必要感のある課題」を設定する。必要感のある課題は「何ができるようになるか」の視点で、聞くことの力が身に付かなければ解決できない課題として設定する。必要感のある課題を設定すれば、生徒は、聞くことの力を高める意欲をもち、主体的に学習を進めることができると考える。

次に必要感のある課題のパフォーマンスを見取るために、生徒と作成したルーブリックを用いる。ルーブリックは、生徒の達成度を段階的に評価するものである。聞くことの力のように、生徒の内面や音声言語を評価する際にはルーブリックを用いるのが適していると考える。ルーブリックは「どのように学ぶか」の視点で、生徒と練り合いながら作成することで、生徒が学習の到達目標を把握できるようにする。生徒と作成したルーブリックを用いれば、生徒は他者との対話を通して学習の到達目標を把握することができ、対話的に学習を進めることができると考える。

さらに、学習の過程でルーブリックを用いた形成的評価を行う。形成的評価は、「何が身に付いたか」の視点で、ルーブリックを用いて相互評価や自己評価、振り返りの活動を行う。学習の過程でルーブリックを用いた形成的評価を行えば、生徒は、学習の到達目標に対しての達成度を形成的に把握することができ、パフォーマンスの不足を補完する学習をしたり、身に付けた力を実感したりして、深い学びを実現することができると考える。

以上のことから、生徒の聞くことの力を高めるために、必要感のある課題を設定し、生徒と作成したルーブリックを用いた形成的評価をすることで、主体的・対話的で深い学びが実現され、聞くことの力を高めることができると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

中学校国語科の指導において、聞くことの力を高めるために、必要感のある課題を設定したり、生徒と作成したルーブリックを用いた形成的評価をしたりすることの有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究仮説（見通し）

聞くことの力を高めるために

１　聞くことの力を身に付けなければ解決することができない必要感のある課題を設定すれば、生徒は、聞くことの力を高める意欲をもつことができるようになり、主体的な学びを実現することができるだろう。

２　生徒と作成したルーブリックを用いれば、生徒は、他者との対話を通して学習の到達目標を把握することができ、対話的に学習を進めることができるだろう。

３　ルーブリックを用いた形成的評価を行えば、生徒は、学習の到達目標に向けての達成度を形成的に把握することができ、パフォーマンスの不足を補完するための学習をしたり、学習によって身に付けた力を実感したりして、深い学びを実現することができるだろう。

Ⅳ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　文言の定義

形成的評価とは

学習過程において、生徒の学習状況を把握し、更なる学習を促進したり、奨励したりするために適切なフィードバックを与えることを目的とする評価のことである。生徒にとっては、現段階においてどの程度、到達目標を達成できているかを見ることにつながる評価である。

本研究では、生徒が相互評価や自己評価を通して形成的評価を行い、学習の到達目標に対する達成度を把握することで、聞くことのパフォーマンスで不足していることを補う学習をしたり、学習方法を改善したりして、学習によって身に付けた力を実感することができるようになると考える。

(2)　手立ての説明

①　必要感のある課題を設定する

生徒が「やってみたい」「やらなければならない」と必要感を感じることができるような課題を構想する。構想の仕方は図１のように例示する。必要感のある課題を構想するために、必要感のある課題作成シート（次ページ図２）を作成した。このシートは数字を入力し、プルダウンメニューで選択することで、課題構想に必要な情報が簡単に入力できるようになっている。このシートを利用して

○　必要感のある課題の構想の仕方
　１　学習する単元を構想する。
　２　学習指導要領上での位置付けを確認する。
　３　育成を目指す資質・能力を明確にする。
　４　評価規準を作成する。
　５　必要感のある課題作成シートで必要感のある課題を構想する。

☆　必要感のある課題作成シートで構想すること
　ア　言語活動のゴールを考える（例：グループ・ディスカッションで話し合い、他の人の意見との共通点や相違点を考える）。
　イ　学習者が担うべき役割を考える（例：グループ・ディスカッションで話し合い、他の人の意見を聞く）。
　ウ　言語活動の相手を考える（例：グループ・ディスカッションで話し合うグループの人）。
　エ　想定されている状況を考える（例：合唱コンクールが終わった直後であり、今後のクラスの方向性を考えるためにクラスの人から意見を聞かなければならない）。
　オ　生み出すべき作品（成果物）を考える（例：クラス全体への提案事項を考える）。
　カ　評価の観点を考える（例：グループ・ディスカッションを通して話し合うことで聞くことの力が高まる）。

図１　必要感のある課題の構想の仕方

必要感のある課題を作成する。

必要感のある課題を生徒に提示することで、生徒は聞くことの力を高めなければならないという意欲をもつことができ、主体的に学習に取り組むことができると考える。

② 生徒と作成したルーブリックを用いる

必要感のある課題を解決するためのパフォーマンスを見取るために、生徒と作成したルーブリックを用いる。ルーブリックを作成するために、ルーブリック作成シートを作成した（図３）。ルーブリック作成シートは、必要感のある課題作成シートに関連付けてあるので、必要な情報が自動で入力されている。ルーブリック作成シートを活用して、教師用ルーブリックを作成する（図４）。

次に、生徒が相互評価・自己評価をしやすいように、指導者が重要だと考える一項目に絞り込んだ生徒用ルーブリックの原案を作成する（図５）。生徒用ルーブリックの原案を基に、指導者と生徒が練り合いながらルーブリックを完成させていくことで、生徒は他者との対話を通して学習の到達目標を把握することができ、対話的に学習を進められると考える（図６）。

③ ルーブリックを用いた形成的評価を行う

単元の学習の過程において、生徒が学習の到達目標に対しての達成度を形成的に把握するために、ルーブリックを用いた形成的評価を行う。形成的評価は、生徒による相互評価や自己評価を行ったり、生徒による振り返りの活動を行ったりする。

ルーブリックを用いた相互評価や自己評価､振り返りの活動を行うことで、パフォーマンスの不足を補うための学習をしたり、学習によって身に付けた力を実感したりして、深い学びを実現することができると考える。

必要感のある課題作成シート

○必要感のある課題の作成

言語活動のゴールは何か？	
学習者が担う役割は何か？	
言語活動の相手は誰か？	
想定されている状況は何か？	
生み出すべき作品は何か？	
評価の観点は何か？	

○必要感のある課題

図２　必要感のある課題作成シート（一部抜粋）

ルーブリック作成シート

○評価の観点

（・知識・技能）	
（・思考力・判断力・表現力）	
（・主体的に学習に取り組む態度）	

○ルーブリック

評価の観点	A	B	C
知識・技能			
思考力・判断力・表現力等			
主体的に学習に取り組む態度			

図３　ルーブリック作成シート（一部抜粋）

	A（スキルを活用し、相手の言動を意図的に操作している状態）	B（スキルを身に付けた状態）	C（現状の生徒のままの状態）
態度	相手の話を笑顔で聞き、うなずくなど身振りを交えることができ、効果的に相づちをうつことで、相手に安心感を与えることができている。	相手の話を笑顔で聞き、話に合わせてうなずくなど身振りを交えることができている。	相手の話を身振りを交えたり、笑顔で聞いたりすることができない。
思考	相手の主張を聞き、自分の主張との共通点や相違点を相関関係が分かるようにメモにとっている。	相手の主張を聞き、自分の主張との共通点や相違点をメモにとることができている。	相手の主張を聞き、自分の主張との共通点や相違点をメモにとることができない。
表現	相手の主張を聞き、自分の主張との共通点や相違点を踏まえて、質問をすることで新たな考えに気付き、やりとりを繰り返している。	相手の主張を聞き、自分の主張との共通点や相違点を踏まえて、質問をしている。	相手の主張を聞き、自分の主張との共通点や相違点を踏まえて、質問をしていない。

図４　教師用ルーブリック

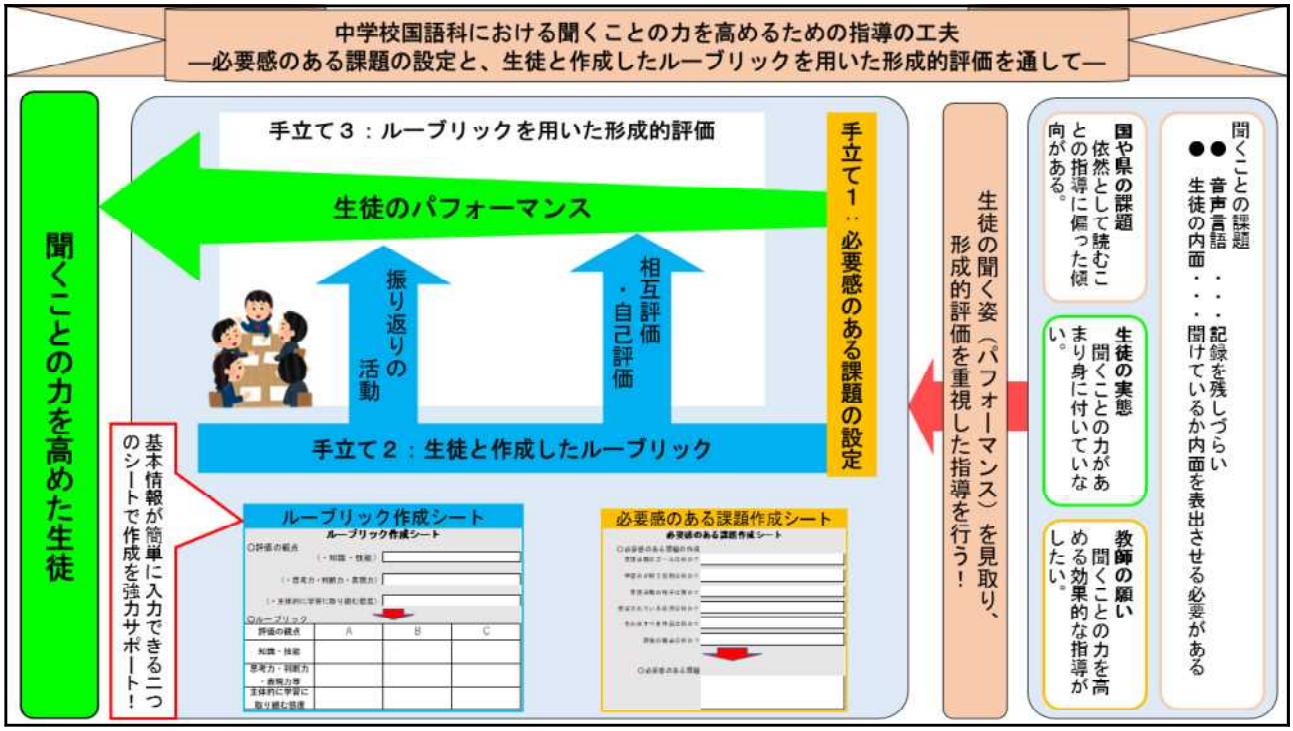
	A	B	C
記述語	相手の考えを正しく聞き、自分の考えとの共通点や相違点を見いだし、質問をして新たな考えに気付き、やりとりを繰り返している。	相手の考えを聞き、自分の考えとの共通点や相違点を見いだし、質問をしている。	相手の考えを聞き、自分の考えとの共通点や相違点を見いだし、質問をすることができない。

図５　生徒用ルーブリックの原案

ア　生徒の実態を踏まえて、必要感のある課題を解決する姿を想像し、ルーブリック作成シートを活用して教師用のルーブリックを作成する。
イ　生徒から引き出したい言葉を想像して、生徒用ルーブリックの原案を作成する。
ウ　必要感のある課題を提示した後、モデルを示し、生徒がパフォーマンスの到達目標を考えられるようにする。
エ　指導者が生徒の到達目標を引き出し、指導者と生徒の練り合いを通して評価基準としての記述語を考える。
オ　ルーブリック表に記述語を記し、ルーブリックとする。

図６　ルーブリックの作成の仕方

２　研究構想図



Ⅴ　実践の計画と方法

１　授業実践の概要

(1)　授業実践Ⅰ

対象	研究協力校　第２学年　　121名（31名・４学級）
実践期間	令和元年　７月９日～７月16日（各クラス３時間）
単元名	「三年生に進路選択を教えてもらえるように話しやすい聞き方を考えよう」
単元の目標	「上級学校調べ」で三年生に進路選択の仕方を教わるために、話し手が「話しやすい聞き方」を考える活動を通して、他者の考えと自分の考えを比較し、自分の考えをまとめ、メモに書いたり、質疑をしたりするなどして表現することができる。

①　必要感のある課題を設定する

学習指導要領解説国語編第３章第２節２Ａ(1)エ「論理の展開などに注意して聞き，話し手の考えと比較しながら，自分の考えをまとめること」を念頭に置き、生徒の実態を考慮しながら必要感のある課題を作成する。

本授業実践では自作の教材で授業づくりをする。第２学年の生徒たちにとってキャリア教育は関心が高く、特に上級学校調べは今後の進路選択においても大変必要感のある学習である。

そこで、次の２点を重視して課題を作成することとする。

ア　生徒たちが必要感をもって取り組めるように、現在進路選択をしている３年生から必要な情報を集めることを課題とする。

イ　話し手の考えと比較する場として、３年生から多くの情報を引き出すために、２年生同士が話し合うことで自分の考えをまとめることを、課題とする（６ページ「必要感のある課題」参照）。

②　生徒と作成したルーブリックを用いる

必要感のある課題に対して、パフォーマンスを見取るために、生徒と作成したルーブリックを用いる。ルーブリックは、教師が生徒用と教師用を作成しておき、生徒との話合いを通して加除訂正をしながら完成させていくこととする。本授業実践では、モデルとなる動画を二種類用意し、生徒が視聴することで、ルーブリックの記述語を考えられるようにする。

まず、Ｃ基準の記述語を生徒と作成していく。次に、Ｂ基準、Ａ基準を個人で考え、個人で考

えた記述語をもち寄ってグループ活動で記述語を考えられるようにする。最後に、グループごとに記述語を発表するよう促し、全体で記述語をまとめられるようにする。

③　ルーブリックを用いて形成的評価を行う

学習の過程で、ルーブリックを用いた形成的評価を行う。

生徒が考えた「話しやすい聞き方」を模擬実践する過程で、１回目の実践の後にルーブリックで自己評価、相互評価を行い、評価の内容をフィードバックするようにする。また、教師側からも１回目の様子を全体に伝え、再度Ａ基準を目指して改善を加えるよう促すようにする。

(2)　授業実践Ⅱ

対象	研究協力校　第１学年　　144名（28名・５学級）
実践期間	令和元年　11月５日～11月11日（各クラス４時間）
単元名	「話題や方向を捉えて話し合おう　グループ・ディスカッションをする」
単元の目標	話題や展開を捉えながらグループ・ディスカッションを行い、質問をし合い、自分の考えと他者の考えとの共通点や相違点を踏まえて、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

①　必要感のある課題を設定する

聞くことの力を高めることが目的となるような「必要感のある課題」を設定する。

必要感のある課題は学習指導要領解説国語編第３章第１節２Ａ(1)エ「必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え，共通点や相違点などを踏まえて，自分の考えをまとめること」を踏まえ、生徒の実態から作成する。

本授業実践では、次の２点を重視して課題を作成することとする。

ア　研究協力校では、授業実践の直前に合唱コンクールが終了している。この合唱コンクールで築いたクラスの和を維持したり、改善したりすることに必要感を見いだし課題とする。

イ　グループ・ディスカッションをするためには、相手の主張を正確に聞き、自分の考えをまとめられなくてはならない。グループ・ディスカッションを効果的に行うために、聞くことの力を高めるという必要感を見いだし課題とする(７ページ「必要感のある課題」参照)。

②　生徒と作成したルーブリックを用いる

第１回の授業実践の反省を生かし、聞くことの力を高めることが目的となるようなルーブリックを作成する。

本実践授業でのルーブリックは、モデルとなる動画を視聴した後、教師と生徒の話合いによってＡ基準を作成し、Ｂ基準、Ｃ基準は生徒同士の話合いによって記述語を作成するようにする。

③　ルーブリックを用いて形成的評価を行う

必要感のある課題を解決するために、２回のグループ・ディスカッションに取り組み、それぞれのグループ・ディスカッションにおいて､ルーブリックを用いて相互評価・自己評価をしたり、学習の終末では振り返りの活動をしたりできるようにする。

２　検証計画

検証項目	検証の観点	検証方法
見通し１	必要感のある課題を設定したことが、生徒の学習に対する意欲を高め、主体的な学びを実現するために有効であったか。	・学習活動の観察 ・ノートやワークシートの記述 ・ルーブリックによる評価
見通し２	生徒と作成したルーブリックを用いたことが、他者との対話を通して学習の到達目標を把握し、対話的に学習を進めることに有効であったか。	
見通し３	ルーブリックを用いて形成的評価を行ったことが、生徒が学習の到達目標に向けての達成度を把握し、パフォーマンスの不足を補完するための学習をしたり、身に付けた力を実感したりすることができるようになり、深い学びを実現するために有効であったか。	

３　評価規準

(1)　**授業実践Ⅰ**「三年生に進路選択を教えてもらえるように話しやすい聞き方を考えよう」

国語への関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと	言語についての知識・理解・技能
能動的な聞き方を身に付け、話し手の思いを積極的に受け取ろうとしている。	話し手の思いを受け取り、自分の知識や経験と比較しながら、自分の考えをまとめている。	話し手の意見とそれを裏付ける根拠の関係を理解している。

(2)　**授業実践Ⅱ**「話題や方向を捉えて話し合おう　グループ・ディスカッションをする」

国語への関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと	言語についての知識・理解・技能
課題解決に向けて積極的にグループ・ディスカッションに参加しようとしている。	グループ・ディスカッションで質問をし合い、自分の考えと他者の考えとの共通点や相違点を踏まえて、自分の考えを広げたり深めたりしている。	質問をし合うことで得た情報を比較や分類、関係付けるなどして整理している。

４　指導計画

(1)　**授業実践Ⅰ**「三年生に進路選択を教えてもらえるように話しやすい聞き方を考えよう」

段階	時	基本的な学習活動	研究上の手立て
つかむ	第一時	・単元の課題を設定する。	○必要感のある課題を提示する
		○必要感のある課題 二年生の総合的な学習の時間に「上級学校調べ」がある。上級学校調べは、今後の進路選択において大変重要な学習である。あなたは、自分の進路が明確に決まっていないので、三年生の先輩にどのように進路選択をしているのか聞きたいと思っている。そこで、三年生の先輩方から進路選択の仕方をたくさん話してもらうために、三年生が「話しやすい聞き方」を考えよう。	
		・必要感のある課題を基にルーブリックを作成する。	○現在の状況をパフォーマンスのＣ基準として、ルーブリックの記述語を生徒と共に作成し、Ｃ基準を基にして、クラス全体での話合いで、Ｂ基準、Ａ基準を作成できるようにする。
追究する	第二時	・課題を解決するための「話しやすい聞き方」について考える。	○課題を解決するために、ペア学習やグループ学習を取り入れ、いろいろな考え方に触れられるようにすることで「話しやすい聞き方」が考えられるようにする。 ○話合い活動の際は、ルーブリックを用いて自己評価、相互評価ができるようにする。
まとめる	第三時	・グループで「話しやすい聞き方」を実践し、評価する。	○話し合った「話しやすい聞き方」を実践するために、シナリオを用意し、グループで「質問者」「評価者」の役割分担をして実践できるようにする。
		・ルーブリックを用いて振り返りの活動を行う。	○単元の学習を振り返るために、ルーブリックを用いて学習の軌跡を想起するよう促し、学習前の自分と学習後の自分を比較させることで、身に付けた力が実感できるようにする。

(2)　**授業実践Ⅱ**「話題や方向を捉えて話し合おう　グループ・ディスカッションをする」

段階	時	基本的な学習活動	研究上の手立て
つかむ	第一時	・単元の課題を設定する。	○必要感のある課題を提示する。
		○必要感のある課題 クラスで練習を重ねてきた合唱コンクールが終わった。この間、クラスは団結を深めることができただろうか。１年生として学校生活を送るのは残り５ヶ月である。この５ヶ月間の過ごし方でこれからの学校生活が更に充実したものになっていく。そこで、クラスの現状を把握し、今後の方向性をグループ・ディスカッションを通して考えていきたい。他者の意見をしっかりと聞き、自分の意見との共通点や相違点を踏まえて、今後のクラスの方向性を考え、クラスに提案しよう。	
		・必要感のある課題を基にルーブリックを作成する。	○ルーブリックを考えられるようにするために、モデル動画を提示し、Ａ基準の記述語を生徒と作成し、Ｂ基準とＣ基準の記述語を生徒同士で話し合わせる。 ○作成したルーブリックを基に、今後の学習計画を立てられるようにする。
追究する	第二時	・１回目のグループ・ディスカッションに取り組む。	○相手の主張を聞き、自分の意見との共通点や相違点を踏まえ、自分の考えがもてるようにするために、テーマを「クラスの現状を把握しよう」とし、グループ・ディスカッションに取り組めるようにする。
		・ルーブリックを用いて相互評価を行う。	○生徒による形成的評価を行えるようにするために、ルーブリックを用いて相互評価を行えるようにし、フィードバックをする。
	第三時	・２回目のグループ・ディスカッションに取り組む。	○テーマを「クラスの方向性を考えよう」とし、相手の主張を聞き、自分の意見との共通点や相違点を踏まえ、自分の考えをもって、グループ・ディスカッションに取り組めるようにする。
		・ルーブリックを用いて相互評価を行う。	○生徒による形成的評価をするために、ルーブリックを用いて相互評価を行い、フィードバックをする。
まとめる	第四時	・グループ・ディスカッションで話し合ったことを提言書としてまとめる。	○グループ･ディスカッションで話し合ったことをまとめさせるために、提言書を用いて、クラスへの提言ができるようにする。
		・本単元の学習を振り返り、学習のまとめをする。	○グループ・ディスカッションを振り返れるようにするために、振り返りシートを用いて、自己評価ができるようにする。

Ⅵ　研究の結果と考察

１　聞くことの力が身に付かなければ解決することができない必要感のある課題を設定すれば、生徒は、聞くことの力を高める意欲をもつことができるようになり、主体的な学びを実現することができるだろう。（見通し１）

(1)　第１回　授業実践

必要感のある課題を生徒に提示し、学習を進めたところ、生徒は、「自分は何を学習するのか」「なぜ学習しないといけないのか」を考えることができ、主体的に学習計画を立てる姿を見ることができた(図７)。

2　必要感のある課題をルーブリックとして考えた状況まで到達するために、どのような学習をすればよいでしょうか。学習計画を立ててみましょう。

相手とよいコミュニケーションをとるために聞く態度や、相手の立場をを考える。

図７　生徒が立てた学習計画

しかし、授業を重ねる中で、本実践の授業内容が、指導事項とずれていることに気が付いた。「話しやすい聞き方」を対話を通して考える「思考力・判断力・表現力等」の学習よりも、どのようにしたら話しやすい聞き方をすることができるかの「知識・技能」の学習に重きが置かれていた。

これは、必要感のある課題に指導事項を踏まえた文言が書かれていないことが原因であると考えられる。必要感のある課題を提示する際も、聞くことの指導事項を意識した提示の仕方をしていなかった。そのため、生徒には知識・技能の学習であるという意識が生まれてしまったと考えられる。

必要感のある課題を作成する際には、指導事項からずれない工夫が必要である。

(2)　第２回　授業実践

必要感のある課題の提示後に振り返りの活動として、今後の学習計画を立てる活動をしたところ、「笑顔が多い明るいクラスにするためにグループの人の意見をしっかり聞く」「グループの人の意見を聞くためにメモをしたり、質問をしたりできるようにする」「友達の意見と自分の意見との共通点や相違点を考え、質問や発言をする」という言葉を数多く聞くことができた。生徒は主体的に学習を進め、聞くことの力を高めていこうとしていることが分かった。

この必要感のある課題を提示したことで、生徒はクラスの現状を考えたり、クラスの方向性を考えたりするために話し合う必要感と、グループ・ディスカッションをするために聞くことの力を高めなくてはならないという必要感を感じることができていた。

２　生徒と作成したルーブリックを用いれば、生徒は、他者との対話を通して学習の到達目標を把握することができ、対話的に学習を進めることができるだろう。（見通し２）

(1)　第１回　授業実践

ルーブリックを生徒と作成したところ、生徒は学習の到達目標を対話を通して明確にすることができ、どのように学習を進めていけばよいのかを考えることができた（図８）。

○グループの人と話し合った後のルーブリック

	A	B	C
記述語	笑顔でたくさん話してくれる。 笑顔で楽しそうに質問にたくさん答える。	話しやすそうな様子 話は進むが質問にしか答えてない	話しづらそうな様子

図８　生徒と作成したルーブリック

しかし、改めてルーブリックの記述語を見直してみると、ルーブリックの記述語が「思考力・判断力・表現力等」を高める記述語というよりは「知識・技能」を高める記述語になっていることに気付いた。前述のとおり、必要感のある課題の設定の中でも指導事項とのずれを感じたと述べたが、ルーブリックの記述語においても指導事項とのずれが生じている。

Ｃ基準を生徒と作成する際、生徒の考えを優先してＣ基準を作成してしまい、思考力・判断力・表現力等を学習するための記述語をあまり意識していなかったことが大きな原因であると考えられる。

また、Ｃ基準から作成をすると、Ｂ基準、Ａ基準の上限に際限がなくなり、授業者が設定した身に付けさせたい資質・能力を超えた記述語が作成されてしまう恐れがある。

ルーブリックの作成については、作成の仕方を改めて見直す必要がある。

(2)　第２回　授業実践

モデルとなる動画を視聴して、Ａ基準から記述語を考えるようにしたところ、生徒からは「挙手をしている」「応答をしている」「質問をしている」「司会者が発言者を指名している」などの言葉が出てきた。ここで教師から「皆さんが行うグループ・ディスカッションは、どのレベルまで高める必要がありますか」と問い掛けたところ、「相手の意見に応答する必要はある」「やっぱり質問はした方がよい」「挙手は必要だ」という発言があった。生徒の発言から目標としてのＡ基準「挙手をして、相手の意見に応答をし、自分の意見や質問を発言することができる」を記述語として決定した。

続けてＢ基準を考える活動を行った(図９)。Ｂ基準の記述語は、Ａ基準の記述語を基に生徒一人一人が考えるようにした。生徒は、自分自身が絶対に身に付けたい力としてＢ基準の記述語を作成した。グループ活動で互いの記述語を見比べながら、「これではレベルが高過ぎるよ」「今でも十分できるレベルじゃない」と検討を重ねる様子が見られた。各グループで検討した記述語をクラス全体に報告するようにし、クラス全体でＢ基準の記述語を決定した(図10)。

Ｓ１：Ａ基準の前の段階を考えます。私は挙手が苦手だから挙手をすることは難しいと考えています。だから、「相手の意見に応答をし自分の意見や質問を発言することができる」にしました。

Ｓ２：悪くないけど、相手の意見に応答する方が難しいと思う。

Ｓ１：グループ・ディスカッションだから応答しないとだめではないかと思いますが。

Ｓ３：応答ってレベルが高過ぎると思う。

Ｓ２：そう思う。応答という言葉は外した方がいい。

Ｓ４：せっかく学習するんだから挙手はしようよ。

Ｓ３：挙手はあった方がいい。

Ｓ１：では、「挙手をして、自分の意見や質問を発言することができる」でいいですか？

Ｓ２：まだ自信ないな。

Ｓ４：質問も外そうよ。私は最初から質問は難しいと思ってたんだ。

Ｓ３：十分できるレベルになってしまわない？

Ｓ４：質問はハードル高いよ。頭でいろいろ考えないと質問できないよ。

Ｓ２：まずは発言することをＢ基準にしない？

Ｓ１：それなら「挙手をして、自分の意見を発言することができる」にしましょう。

Ｓ　：賛成！！

図９　ルーブリックを作成する際のあるグループのやり取り

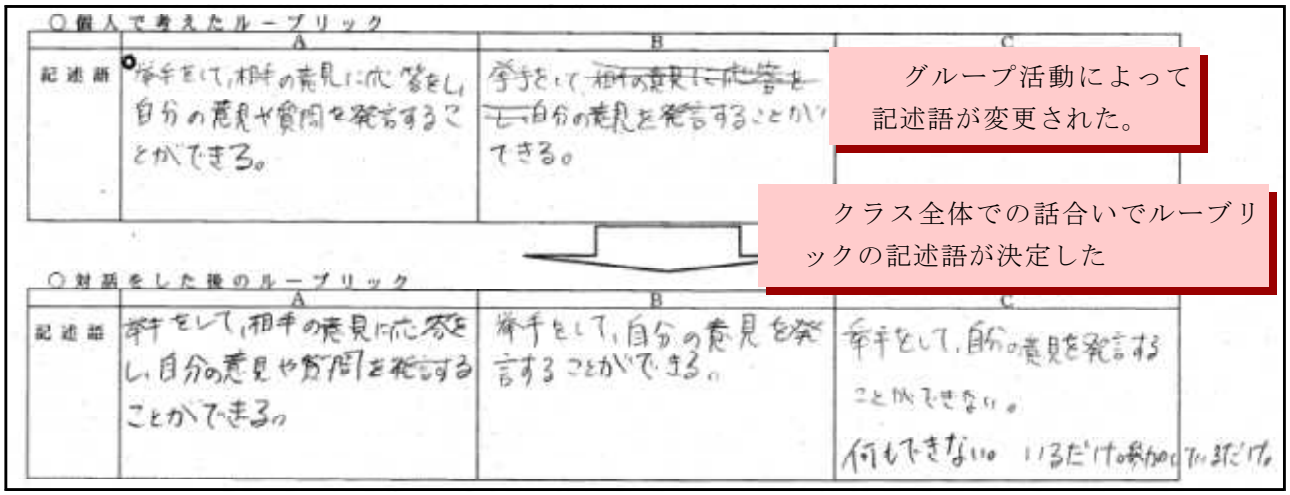


図10　グループ活動後に完成した生徒のルーブリック

Ｃ基準の記述語は「Ｂ基準ができない」ことを記述語として設定した。

本実践授業ではＡ基準の記述語から生徒と考え、Ｂ基準、Ｃ基準はグループでの話合いを中心に記述語を考えるようにした。Ｂ基準、Ｃ基準の記述語を考える際は、生徒間で「ここまではできるようになりたい」「これはできない」という葛藤する様子が見られ、学習の到達目標をどこ

に設定するかを真剣に考えている様子が見られた。

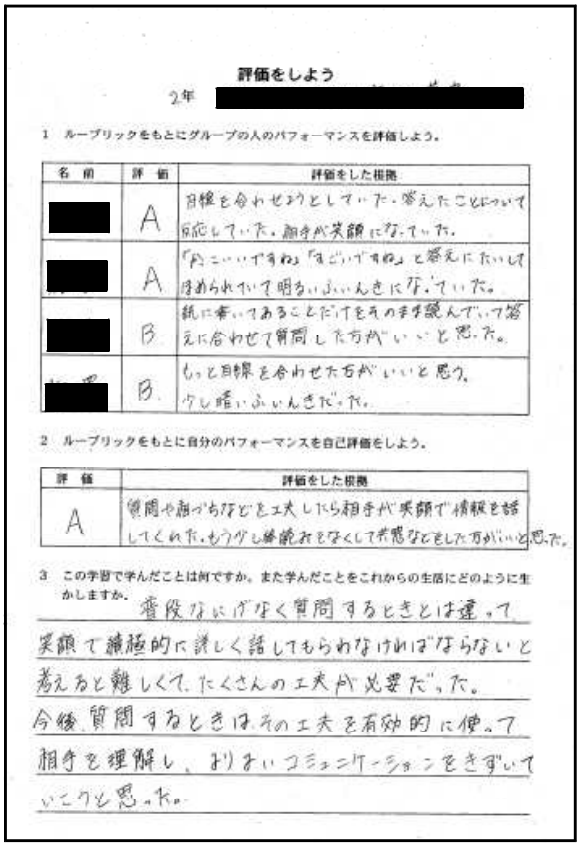
生徒と作成したルーブリックを用いたことによって、生徒は教師や生徒相互との対話を通して学習の到達目標を把握することができた。

３　ルーブリックを用いた形成的評価を行えば、生徒は、学習の到達目標に向けての達成度を形成的に把握することができ、パフォーマンスの不足を補完するための学習をしたり、学習によって身に付けた力を実感したりすることができ、深い学びを実現することができるだろう。（見通し３）

(1)　第１回　授業実践

ルーブリックを用いた形成的評価として、ルーブリックを用いた相互評価と自己評価を行ったところ、生徒は他者からの評価を受け、ルーブリックにおける到達目標に対してパフォーマンスとして不足していることを把握した。さらに、不足分を補うために、「相手の話は笑顔で聞こう」「メモをとって相手の考えを理解しよう」「質問や相づちの仕方を工夫しよう」などの改善策を考える様子が見られた（図11）。改善策を基に再度、模擬実践に取り組む生徒の姿が見られ、２回目の模擬実践でＡ評価の判定をもらうことができると、自分の実践結果に自信をもてた様子が見られた。

ルーブリックを用いた形成的評価は、聞くことの力を高めるために大変効果的である。



評価をしよう

2年 [redacted]

1　ルーブリックをもとにグループの人のパフォーマンスを評価しよう。

名前	評価	評価をした根拠
[redacted]	A	目線を合わせようとしていた。答えたことについて反応していた。相手が笑顔になっていた。
[redacted]	A	「へーいいですね」「すごいですね」と答えにたいしてほめられていて明るいふいんきになっていた。
[redacted]	B	紙に書いてあることだけをそのまま読んでいて答えに合わせて質問した方がいいと思った。
[redacted]	B	もっと目線を合わせた方がいいと思う。少し暗いふいんきだった。

2　ルーブリックをもとに自分のパフォーマンスを自己評価をしよう。

評価	評価をした根拠
A	質問や相づちなどを工夫したら相手が笑顔で情報を話してくれた。もう少し緊張をなくしてみるなどをした方がいいと思った。

3　この学習で学んだことは何ですか。また学んだことをこれからの生活にどのように生かしますか。

普段なにげなく質問するときとは違って笑顔で積極的に詳しく話してもらわなければならないと考えると難しくて、たくさんの工夫が必要だった。今後質問するときはその工夫を有効的に使って相手を理解し、よりよいコミュニケーションをきずいていこうと思った。

図11　第１回授業実践評価シート

(2)　第２回　授業実践

①　１回目のグループ・ディスカッション

１回目のグループ・ディスカッションは「クラスの現状を把握しよう」というテーマで行った。それぞれがルーブリックを手元に置き、記述語を確認しながらグループ・ディスカッションに取り組んだ。生徒は、小学校や各教科で行ってきた話合い活動がグループ・ディスカッションであることに気付き、これまでの話合い活動を想起しながらグループ・ディスカッションに取り組んでいた。

○１回目の相互評価・自己評価（No.４への評価）

評価者	評価	評価の根拠
No.１	B	自分の意見をしっかりと言っていたのでよかったです。質問がもう少しできるとよかったと思いました。
No.２	B	質問をしていませんでした。
No.３	B	自分の意見はなかったけど、挙手ができていたのでＢとしました。

No.４にフィードバック

○相互評価後のNo.４の自己評価

自己評価	自己評価の根拠
B	質問や応答をするのを忘れてしまいました。次は気を付けます。

図12　１回目の相互評価・自己評価

グループ・ディスカッションの後に、ルーブリックを用いて生徒による相互評価を行った。各グループで相互に評価し合い、評価した根拠をフィードバックするようにした。生徒はルーブリックの記述語を確認しながら、よかった点、改善点を伝えることができた。

また、フィードバックを受けた後に自己評価も行った。生徒は、相互評価でもらった意見を基にパフォーマンスの不足を補うために、２回目のグループ・ディスカッションに向けて改善すべきことを考えることができた（図12）。

②　２回目のグループ・ディスカッション

２回目のグループ・ディスカッションは「クラスの方向性を考えよう」というテーマで行った。１回目の反省を生かしてグループ・ディスカッションに取り組む様子が見られた。

相手の主張に対して応答を必ず入れるようにしたり、必要に応じてメモを取りながら共通点や相違点を見いだしたりして、１回目よりも活発なグループ・ディスカッションが取り組まれた。

２回目のグループ・ディスカッションにも相互評価を取り入れた。ルーブリックを用いて評価を行い、評価したことをフィードバックするようにした。相手の評価をＡとする生徒が大変多くなり、ルーブリックの記述語を目標として聞くことの力が高まっていると感じている生徒が多いことが分かった。

○２回目の相互評価・自己評価（No.４への評価）

評価者	評価	評価の根拠
No.１	A	質問ができていて、応答もしていました。その他もよく聞いている様子が見られ、全体としてよかったです。
No.２	A	応答をし、意見や質問を発表していたからです。
No.３	A	挙手も応答も自分の意見や質問の発表ができていたからＡです。

No.４にフィードバック

○相互評価後のNo.４の自己評価

自己評価	自己評価の根拠
A	昨日よりも自分から進んで質問や応答もできたからＡにしました。反省を生かすことができました。

図13　２回目の相互評価・自己評価

自己評価では、１回目の評価と比較をするようにしたことにより、生徒はパフォーマンスの不足を補い、身に付けた力を実感することができた（図13）。

③　ルーブリックを用いた相互評価・自己評価による生徒の変容

第２回の授業実践ではルーブリックと評価シートを用意し、２回のグループ・ディスカッションに取り組むようにした。２回の評価シートの自己評価の様子から生徒の変容の様子を分析した。

なお、今回の授業実践では研究協力校の第１学年の生徒 132人を対象に行った（図14）。

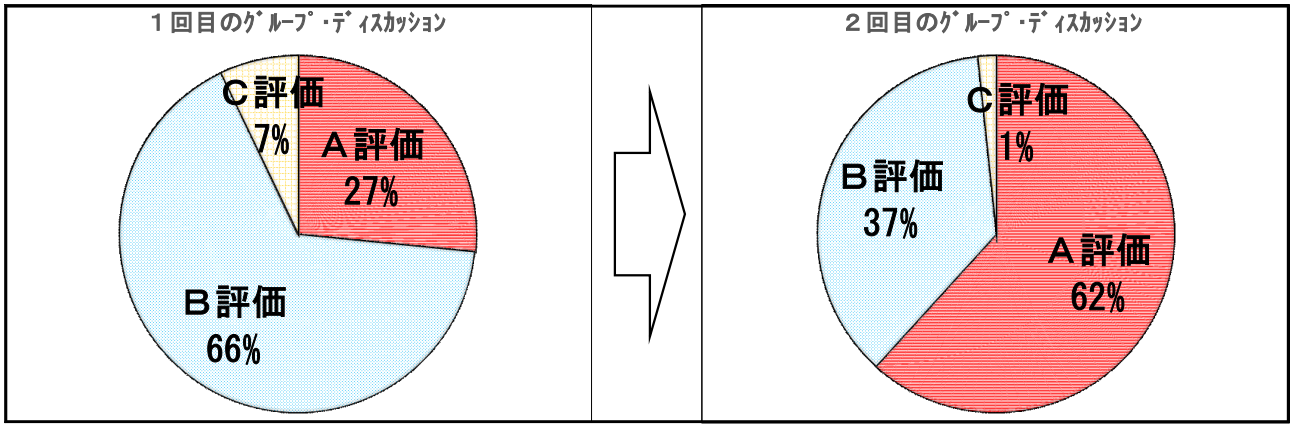


図14　２回の自己評価の変化

数値やグラフを見ても分かるとおり、１回目でＢ評価と評価した生徒が２回目ではＡ評価と評価している。またＣ評価と評価した生徒は、Ｂ評価と評価している。これは、２回の相互評価のフィードバックにより、生徒がルーブリックの評価基準まで聞くことの力を高めることができ、自分自身の変容を実感しているからだろうと考えられる。

このように、ルーブリックを用いた相互評価・自己評価を行えば、生徒は学習の到達目標に向けての達成度を形成的に把握することができ、聞くことの力を高める学習をすることができると考える。

④　ルーブリックを用いた振り返り活動

学習の振り返り活動として、「振り返りシート」を用いて自己評価を行った（次ページ図15）。振り返りシートは「相手の主張を正しく聞くことができたか」「この学習で身に付けた力はどのような力か」「身に付けた力をこれからどのように使っていくか」を生徒に問い、聞くことの力が身に付いたかどうかを自己評価する形で振り返れることができるようにした。

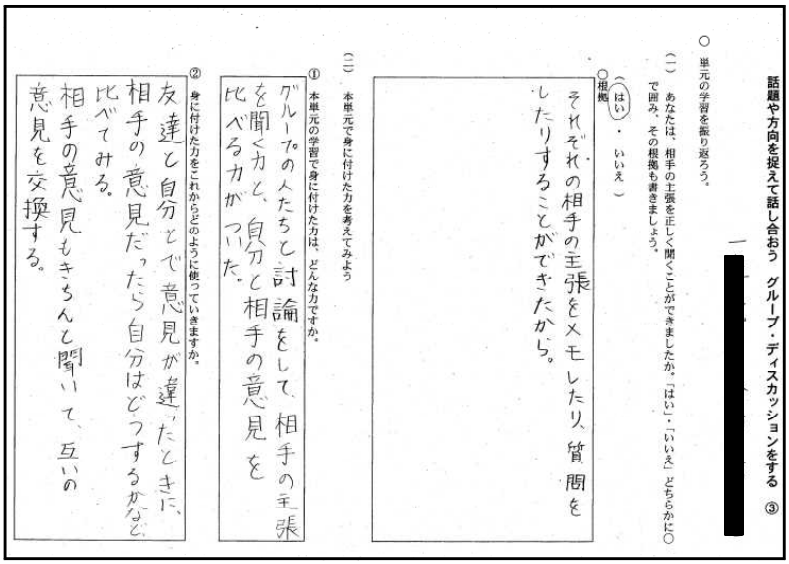
２回のグループ・ディスカッションに取り組み、それぞれ、ルーブリックを用いて相互評価、自己評価を行ったことで、生徒は聞くことの力が身に付いたと実感し、身に付けた力を他の活動に生かしていきたいという意欲をもつことができた。

振り返りシートの自己評価の分析では、「相手の主張を正しく聞くことができたか」の問いに

127人（96%）の生徒が「はい」と回答し、５人（４%）の生徒が「いいえ」と回答した。

「身に付けた力はどのような力か」の問いに、「相手の目を見て聞く」や「うなずきながら聞く力」など聞く態度が身に付いたと回答した生徒が15人（12%）、「相手の主張をメモに取る力」や「相手の主張と自分の主張との共通点や相違点を考える力」など聞く思考が身に付いたと回答した生徒が40人（30%）、「相手の主張に応答する力」や「相手の主張に対して質問する力」など聞く表現が身に付いたと回答した生徒が57人（43%）いた（図16）。

生徒は、今回の授業実践で聞くことの力が身に付いたことを実感していることが分かる。必要感のある課題を設定し、生徒と作成したルーブリックによる形成的評価を行うことは、生徒が身に付けた力を実感し、これからの生活に生かしていこうという意欲をもつことにつながり、主体的・対話的で深い学びを実現するめに効果的であると言うことができる。


話題や方向を捉えて話し合おう　グループ・ディスカッションをする　③

一　[redacted]

○単元の学習を振り返ろう。

（一）あなたは、相手の主張を正しく聞くことができましたか。「はい」・「いいえ」どちらかに○で囲み、その根拠も書きましょう。

（はい・いいえ）

○根拠

それぞれの相手の主張をメモしたり、質問をしたりすることができたから。

（二）本単元で身に付けた力を考えてみよう

①本単元の学習で身に付けた力は、どんな力ですか。

グループの人たちと討論をして、相手の主張を聞く力と、自分と相手の意見を比べる力がついた。

②身に付けた力をこれからどのように使っていきますか。

友達と自分とで意見が違ったときに、相手の意見だったら自分はどうするかなど比べてみる。相手の意見もきちんと聞いて、互いの意見を交換する。

図15　振り返りシート

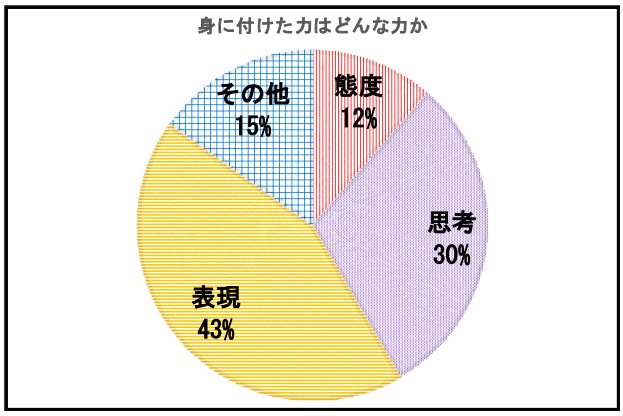


図16　振り返りで実感した力

Ⅶ　研究のまとめ

1　成果

○　聞くことの力を身に付けなければ解決することができない必要感のある課題を設定したところ、生徒は、聞くことの力を高めるためには、相手の主張を理解し、質問をしたり意見を述べたりすることが必要だと考えることができた。また、聞くことの力を高めるための学習計画を考えることができ、主体的に学習に取り組む姿を見ることができた。

必要感のある課題の提示は、何のために学習をするのかを明確に示すことができ、生徒は学習の終末まで､聞くことの力を高めるために学習をしているという意識をもち続けることができた。

○　学習の到達目標を把握するために、生徒と共にルーブリックを作成したところ、生徒は、モデル動画や教師、生徒同士の対話を通して聞くことの力を高める学習の到達目標を考えることができた。また、生徒と作成したルーブリックを用いることで、生徒は、学習過程で聞くことの力を高める到達目標を把握しながら、相互評価・自己評価をすることが可能となり、対話を通して学習を進めることができた。

○　ルーブリックを用いた相互評価・自己評価を行ったところ、生徒は学習の到達目標に向けての達成度を形成的に把握することができ、パフォーマンスの不足を補完するための学習をすることができた。また、ルーブリックを用いた振り返りの活動を行ったところ、生徒は身に付けた力を実感することができ、身に付けた力をこれからどのように生かしていくかを問い掛けたところ、他の教科の学び合いやこれからの進路先での活動などに生かしていきたいという意欲をもつこと

にもつながった。これらは、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成にもつながり、深い学びを実現することができた。

２　課題

○　必要感のある課題は、生徒が主体的に学習に取り組むためには大変効果的であるが、リアルな文脈を意識して作成すると文章が長くなる。本授業実践では、必要感のある課題を電子データ化し、モニターに提示をしたが、黒板に書いたり、模造紙等で作成したりする場合は大変な時間と労力を有する。また、単元の学習中は、必要感のある課題を常に生徒の前に提示をしておくことが望ましいが、黒板で提示をする場合には大変な困難を伴う。必要感のある課題は、提示の仕方に工夫が必要であり、これから研究を進めていかなくてはならないと考える。

○　ルーブリックは、生徒が到達目標を把握し、相互評価・自己評価をしたり、学習の振り返りに活用できたりと主体的・対話的に学習を進めるために大変効果的である。しかし、ルーブリックを用いて客観的な評価をしていくためには、記述語の吟味が必要である。複数の指導者による複数の見方をルーブリックに加えていくことにより、ルーブリックの記述語は、より客観的な評価基準となる。そこで、ルーブルックの記述語は一人で作成をするより、複数の指導者で確認しながら作成していくことが望ましいと考える。

○　ルーブリックを用いて評価することは大変効果的であるが、生徒がルーブリックを使い慣れていないと、ルーブリックの記述語とずれた評価をしたり、ルーブリックを扱えなかったりして、客観的な評価ができない。ルーブリックを使用する頻度を増やし、使い方に慣れるようにすることでより深い学びを実現することができるようになると考える。

Ⅷ　提言

国語科の聞くことの力を高めるために形成的評価を取り入れたが、聞くことのように音声言語を学習する場合には一度のパフォーマンスで評価をするよりも、形成的評価をしながら改善を重ねていく方が学習の効果は高い。話すこと・聞くことでは、形成的評価を取り入れたパフォーマンス評価が大変効果的であると考える。

また、パフォーマンス評価は書くことや読むことの学習にも活用ができる。国語科の学習において、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことのパフォーマンスを見取るパフォーマンス評価に注目をし、指導と評価の一体化を図った授業改善に取り組んでいくことが必要であると考える。

＜参考文献＞

・西岡　加名恵　　石井　英真　編著　『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価「見方・考え方」をどう育てるか』　　日本標準(2019)
・ダイアン・ハート　著　　田中　耕治　監訳著　『パフォーマンス評価入門―「真正の評価」論からの提案―』　　ミネルヴァ書房（2012）
・武藤　明日香　著　『話す能力を高める国語科の授業の開発―パフォーマンス課題を活用した逆向き設計の授業づくりから―』　　岐阜大学教育学部教師教育研究12（2016）
・浅川　学　著　『ルーブリックを活用した国語科授業―中学生の主体的な学びを育むために―』　　山梨大学教育学部教職大学院教育実践研究報告書（2017）
・文部科学省　『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総則編』　　東洋館出版社（2018）
・文部科学省　『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　国語編』　　東洋館出版社（2018）

＜担当指導主事＞

坂本　直之　　尾形　一美